

聖書:使徒の働き16章6～15節

説教:聖霊によって

はじめに

いつものように、これまでのあらすじを振り返ります。パウロが福音を語るとユダヤ人だけでなく異邦人も救われたのはいいのですが、異邦人も割礼を受けるべきだという意見が出て来て、教会はしばらく混乱してしまいます。話し合いの結果、割礼は必要ないということになり、この知らせをほかの教会にも伝えるということも兼ねて、パウロは二回目の伝道旅行に出かけることにしました。三年ぶりにリステラという町に行ってみると、教会がしっかりと立っていただけでなく、テモテというすばらしい青年を見つけ、パウロと一緒に連れて行くことにします。理由は二つありました。将来の指導者に育てるということが一つ。それから、ユダヤ人と異邦人のことはこれから大きな課題になることが予想されます。この問題扱うのにふさわしい人物は誰か。それを考えると、テモテは母親がユダヤ人で父親がギリシア人ですから、両方の立場に偏らずに立って語ることのできる。それがテモテを選んだ理由です。

こうして伝道の旅が始まっていくのですが、予定していたところに行けなくなるということが何度も起きてしまう。これはどういうことなのか。ともに考えてまいります。

## 1 神の計画

### 1) 道が閉ざされる

旅行される方には二つのタイプがあると思います。出かける前にしっかりと計画して決まったコースをきちんとたどっていくタイプ。それからこれとは反対に目的地だけはとりあえず決めておいて、途中のこと、たとえばどの電車にするかとか、どのホテルに泊まるとか、現地に行ってから決めるタイプ。パウロはどちらのタイプか。かつてパリサイ人のリーダーをしていたし、彼の書いた手紙を読んでも感じるのですが、なんでもきっちり決めたい、非常に几帳面な性格だったのではないかと。今回も、目的地をはっきり決めてどの道を通って行くか細かく計画したはず。ところが実際はどうだったか。6節から8節。「それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フリュギア・ガラテヤの地方を通って行った。こうしてミシアの近くまで来たとき、ビティニアに進もうとしたが、イエスの御霊がそれを許されな

かった。それでミシアを通過して、トロアスに下った。」

ここに出てくる「アジア」は、今のトルコ領で地中海に沿ったところ、海側の地域を指しています。パウロは当初、海沿いの道を通って西に行こうと計画していた。ところがどういうわけか、聖霊によって行くことが禁じられた。それで計画を変更して別のルートを通り、今度はビティニアに行こうとしたら、またそれ許されなかった。きっちり立てた計画のとおりにはいかずに、行き当たりばつたりの旅行になってしまいました。さぞっパウロも困ったのではないのでしょうか。

### 2) 禁じられた、許されなかった

ここで不思議なのは、「聖霊によって禁じられた」とか「イエスの御霊がそれを許されなかった」というところです。具体的にはどういうことだったのか。9節にあるように、実際に声が聞こえたのか。あるいは、たとえばこの道の先に盗賊が出るという情報があつてコースを変更しなければならなくなったとか、大雨や地震で道が崩れて通れなくなったとか、そういうことだったのか。詳しくはわからない。とにかく、行こうと思っていた道が次々と閉ざされてしまう。一度は二度であれば、偶然ということでは終わりますが、おそらくなんでもこういうことが続いて、「あ、これは聖霊が道を閉ざしておられる」と判断したのでしょう。

今は受験シーズンの真っ最中で、まさに道が開かれるか閉ざされるか、毎日祈りながら過ごしておられる方もいるでしょう。あるいはこれまでの歩みの中で、行きたい道が閉ざされて途方に暮れたという経験があるかもしれない。こちらに行きたいと強い願いがあればあるほど、進めなかったときの悔しさはずっと後まで残ります。

### 3) 信じながら進む

道が閉ざされてしまったとき、とつさに頭に浮かぶのは「どうして」という疑問です。ダメならダメで、せめてその理由を知りたい。ところがほとんどの場合教えてくれないのです。パウロもそうです。「こちらには行きません」、ただそれだけです。もちろん神さまが意地悪だということではありません。

こう考えてみたらどうでしょう。「あなたはこちらを進みなさい。理由はこうです。」そんなふうに神がいつも教えてくれるとしたらどうでしょう。言われたとおりの道を進むだけですから、こんな楽なことはない。悩みはありません。その代わりに失うものも出て来ます。先のことが分かっているので、「期待」ということはなくなります。「信仰」もありません。信仰がないなら神もいらなくなる。そんな人生って楽しいでしょうか。

先のことがわからないのは、確かに大変です。でもわからないからこそ、私たちは先のことに期待をする。そのために祈ります。祈りがかなえられてときには思いもかけない神のみわざに感激することがある。そういうとき、人生は捨てたもんじゃない、生きていてよかったと思うことがある。そのようにして信仰が強められていく。神がともにおられるといことを実感していきます。先が見えないことにもちゃんと意味あるのだらうと思うのです。

## 2 幻によって

### 1) 「私たちに助けてください」

もちろんいつまでもわからないままではない。時が満ちたとき、道が閉ざされていた理由がわかる 때가くる。9, 10節。「その夜、パウロは幻を見た。一人のマケドニア人が立って、「マケドニアに渡って来て、私たちに助けてください」と懇願するのであった。パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニアに渡ることにした。彼らに福音を宣べ伝えるために、神が私たちに召しておられるのだと確信したからである。」

神さまはあらゆる方法を使ってご自分のご計画を伝えることができます。幻であったり、あるときは夢という手段であったりもします。大切なのは、やはりいつも霊的な目と耳を開いて、主のことばを聞こうと備えているということでしょう。「どうしてですか主よ。私たちはどこに行けばいいのですか」と祈り続けながら、パウロは待っていました。

### 2) 神が召しておられる

そのようなときにパウロは幻を見ます。もっと早く教えてくれればと思うことはあります。けれども神がご自分の計画を明らかにされるのには、ふさわしいときと場所があるようなのです。今がその時でした。あなたはマケドニアに向かいなさい。そこで主のみことばを聞きたいと願い、助けを求めている人たちがいる。そのように確信したパウロは、早速船に乗ってエーゲ海を一日かけて横断

し、今のギリシャに位置するマケドニア地方に向かいます。

## 3 ピリピの町で

### 1) リディアと家族が救われる

船から上がると、その地方の中心的な町であったピリピの町に入ります。はじめて訪れた町では、まずユダヤ人の会堂に向かう。それがいつもの宣教のパターンでした。ところがピリピには会堂がなかった。ユダヤ人が少なかったのでしょうか。それでもユダヤ人は少数ですがいました。彼らは必ず安息日に集まって礼拝を守るはずで、ではどこに集まるか。それが13節にある。「祈り場があると思われた川岸」、これがユダヤ人たちの集会の場所になっていました。

そこにリディアという名の女性も来ていました。「神を敬う人であった」とあります。ユダヤ人ではなかったけれど、旧約聖書の教えをとおして信仰をもっていたらしい。異邦人でありながら安息日にはユダヤ人の集會に集まるというのはかなり珍しい。おそらくずっと以前から心の飢え渴きを感じていたのでしょう。紫布は当時大変高価なもので、貴族や身分の高い人しか買うことができなかったと言われます。そのような商品を扱っていたわけですから、リディアはかなり裕福であったと思うのです。けれども、お金では心を満たすことができなかった。何が真実なのだろうか。ぽっかりとあいた心を埋めてくれるものに出会いたいとずっと願っていた。それがある日、パウロがやってきて福音に触れた。リディアはこれこそ救いの言葉であると信じて、リディアだけでなく家族全員が救われて、バプテスマを受けました。聖書にピリピ人への手紙というところがあります。リディアの家族から始まった信仰の種は、やがてピリピに教会が建てられるまでに大きく成長していきました。

こうしてみると、いままでばらばらにしか見えなかったものが一本の線につながっていきます。パウロが進もうとしていた道が何度も閉ざされました。あのときはまったく理由が分からなかったけれど、救いの言葉を聞きたいとのリディアの祈りを、主が聞き届けてくださり、幻を通してパウロに示された。これが神のご計画でした。

### 2) 細いわだちを進むように

たくさん雪が降ったとき、車のタイヤのわだちをたどって歩くことがあります。タイヤの跡は、必ずしも自分が進みたい方向に伸びているわけではありません。けれども少しでも足を踏み外せば

靴が雪まみれになります。神とともに歩むというのは、なにかこれに似ているような気がします。広くて歩きやすい道ではありません。自分の計画とは違う方向に向かってるように見えるときもある。それでも私たちは細いわだちを進みます。この道の先に、必ず神の約束の場所があると信じられるからです。ときどき吹雪いて前が見えなくなることもあります。強い向かい風で前に進むのがやっとというときもある。そんなとき私たちはしばらくのあいだ忍耐します。少し待てば必ずめざすところが見えてくる。そのことを信じてまた進んでいきます。